

天和師弟問答

しづや りふかふ

若き僧は帰りに人だかりに遭遇しました。天和三年（一六八三）三月二九日、鈴ヶ森刑場にて八百屋お七が火炙りの刑に処せられた場所です。残酷な刑を目前にし、厭世厭離の念を強くしました。或る日、濡れ縁で喫茶しつつ、師に問うて曰く。

師よ。世は業と苦しみに満ちております。現実に救いがありますか。

師は黙然としているだけです。

弟子は更に問い、

師よ、釈迦牟尼はなぜ病に斃れ死したのでしょうか。

師は暫し瞑目したままでしたが、やがて静かにこう言う、

何故左様に問うか。

どのように忌まわしい出来事も、汚らわしい場所も、汚い物も、悍ましい想いも、醜い事件も、受け入れ難い事実も、理不尽な状況も、憎むべき行為も、絶望も、悲惨も、凄惨な現象も、真実である。

それを尊い真理だと言われるのですか。

真理である。だが、肯定せよとは言わぬ。

むしろ、それは真実に反する。人はそれを否み、受け入れ難い、避けたい、逃れたいと希う。解決はない。だが、それを是とするのではない。解決を希う。それ故に解決はない。

師よ、あなたが言われるのは、それらが真理である、しかしながら、それらから逃れたいと希うことも又真理である、ということでしょうか。

いや。

それらが真理である。それらから逃れたいと希うことが真理である。

